

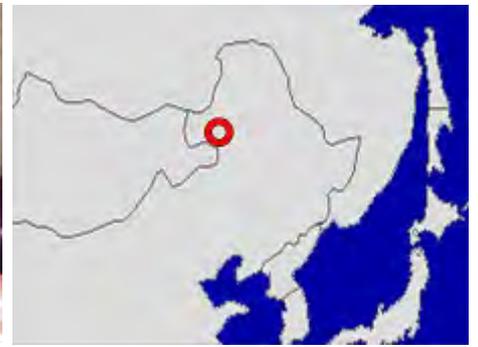
柳楽林市さん

1917(大正6)年8月2日生まれ

当時の本籍地 島根県

陸軍

第23師団歩兵第71連隊



ノモンハン

●1938(昭和13)年1月10日 現役兵として浜田21連隊に入営

・日中戦争が開戦したので生きて戻れないと感じていた。初年兵教育のあと、半分が新設の歩兵第71連隊に。

●1938(昭和13)年7月宇品を出発、11月満州・ハイラルの兵舎に

・渡満した時まだ兵舎が建築中で、新京などで待機したためあまり訓練を行えなかった。

・23師団(小松原師団長)は新設間もなく訓練の時間が短いことと、既設の師団は4個連隊をもって編成されているのに23師団は歩兵3個連隊で兵員数が明らかに少数であり、「弱い」と言われていた。

●1939(昭和14)年5月 第1次ノモンハン事件

・当時、日本はハルハ河を満州とモンゴルの国境だと主張していたが、ソ連はハルハ河より東の長年の内蒙古と外蒙古の境を国境だと主張していた。

・ソ連軍がハルハ河を越境して入ったと言う報告が来ていた。上空では航空戦が行われていて最初は見事なほど敵機が落ちていた。モンゴルのテント(兵舎)への空爆も行われていた。

●1939(昭和14)年7月 第2次ノモンハン事件

・出発前、戦争の事はメモをしてはいけないという命令が出て、筆記用具を取り上げられた。

・工兵隊がハルハ河にかけた橋を渡って夜西岸に越境した。歩兵は横1列に並ばされていたが、夜が明けて向こうが見えるようになると戦車がずらっと並んでいた。

・狙撃兵になれと命じられ、伏せて戦車の窓を狙って38式歩兵銃で撃つ。幾ら当たっても相手は平気。反対に日本軍の砲はソ連軍まで届かない。轢き殺されると思った。

・地雷に竹の柄を付けて持って走り、戦車のキャタピラに突っ込むことも行われた。死ぬことが多い、両目を失明した人も何人かいる。砂地なので、埋まって不発に終わる事も多く、砂地で生き埋めになった人もいる。

・水のない戦場で、気温は日中40度ぐらい。砂を掘っても出てくるのは濁り水、湖は塩水で飲めない。朝草の露をハンカチで集めてまわって絞って飲んだ。

・夜のうちに東岸に撤退することになるが、撤退は恐ろしい。曳光弾がどんどん撃たれ明るくなってしまふ。再び橋を渡ったが、この時川に落ちて捕虜になってしまった者も多い。

・夜襲に3回出かける。昼の攻撃では取れない小高い陣地をこうして少しずつ取っていった。

・多くの者が死んだが、戦場で不服を言う者は誰もいなかった。皆天皇陛下の命令だから死んでいった。90歳頃初めて当時の越境は関東軍の独断で、天皇陛下が「統帥権干犯」と叱責していたことを資料で見て衝撃を受けた。

・ノモンハン事件で日本人の捕虜がものすごく出たのは、軍にとっては衝撃だったのではないかと。当時は戦陣訓は無かったが捕虜になるなんて考えられないことだと皆思っていた。

●1939(昭和14)年7月27日 中隊に総攻撃の命令

・小高い敵陣地に向かってかなりの距離を走って上がっていく。弾がどんどん飛んできて、戦友がどんどん倒れていくが、不思議と自分には当たらない。168人中隊で上の陣地まで突入できたのは20~30人。

・手榴弾を投げたが、投げ慣れておらず20mぐらいしか飛ばない。斜面なのでころころ落ちて来た。

・ソ連軍の将校と目があいピストルで撃たれたが当たらない。38式歩兵銃で応戦したが弾が5発で尽きたので、蝟壺に入って装填しようとした。この時必ず前を見ながら装填しなければいけないと教わっていたが、出来なかった。手榴弾の破片が着弾して右手鎖骨下に負傷、そのまま気を失った。

・夜になると「お〜い、お〜い」という声がして気が付いた。8中隊と連絡がつかなくなったので本部から様子を見に来た、返事をしたのは私1人だと言う。右手はまったく使えず壕から這い上がる力もないので、置いて行ってくれと言ったが、どうにか引きずりだして貰った。

・野戦病院に送られる。名前を呼んで返事をするので輸送機に乗せてくれハイラルに運ばれる。さらに汽車で大連に。

●1939(昭和14)年8月22日大連を民間船で出発、8月24日小倉に上陸

・久留米陸軍病院佐賀臨時分院に入院、東京第1陸軍病院に転院、手術

・その後のノモンハンの経緯については「負けたげな」と風評に聞いただけ。

・自分の経験は遠慮して話さなかった。特に誰かに止められたことはないが悪い事は話さない、そういう時代だった

●1941(昭和16)年1月11日 兵役免除、退院して帰郷

(収録日:2012年9月27日)